キャラクター名: シンリ

プレイヤー名:

種族	フロウライト	種族特徴	魂の輝き、鉱石の生命、晶石の身体		
生まれ	哲学者	性別	男	年齢	225
冒険者Lv	6	経歴	蛮族の中の特定の種族が嫌い（ラルヴァ、そしてノスフェラトゥスが嫌い）		
経験点	0		商人を目指している		
			人族の社会構造に興味がある		

		能力値	A-F	成長	他修正	能力値	ボーナス
技	5	器用度	6			11	1
		敏捷度	9			14	2
体	1	筋力	13	1		15	2
		生命力	8	6		15	2
心	13	知力	2	2		17 + 2	3
		精神力	16	7		36	6

技能	Lv.	技能	Lv.
プリースト/ガメル	6		
セージ	3		
アルケミスト	3		
ウォーリーダー	5		

戦闘特技

魔法拡大/数	226 p		p
MP軽減/プリースト	223 p		p
魔法誘導	223 p		p
	p		p
	p		p
	p		p
	p		p
	p		p
	p		p
	p		p
	p		p
	p		p

言語	会話	読文
交易共通語	○	○
汎用蛮族語	○	○
魔動機文明語	○	○
魔法文明語	○	○
妖精語	○	

練技/呪歌/騎芸/賦術

パラライズミスト	
ヴォーパルウェポン	
バークメイル	
軍師の知略	
堅陣の構え	
鉄壁の防陣2:鉄鎧	
鉄壁の防陣2:堅体	
蘇る秘奥	

名誉アイテム	点数
ジョジョとのコネ	30
学生気分を終わらせたもの	30

名誉点 所持 110 /合計 170

技能

	技能レベル	基本命中力	基本回避力	基本追加ダメージ
ファイター	0			
グラップラー	0			
フェンサー	0			
シューター	0			

鎧と盾

		ランク	必要筋力	回避力	防護点
鎧	スプリントコート		15		5
盾	タワーシールド		15		2
その他補正(防具習熟/回避行動 etc)					3
回避技能			合計値	0	10

武器

武器	用法	必要筋力	命中修正	命中力	C値	追加ダメージ	威力	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
				2d+													
				2d+													
				2d+													

一般装備品 (消耗チェック)

決死のハチマキ	○□□○□□
救命草	○□□○□□
魔香草	○□□○□□
ユリカロアの煙玉	○□□○□□
魔晶石5点x10	○□□○□□
緑Bx100	○□□○□□
緑Ax10	○□□○□□
緑S	○□□○□□
赤Bx100	○□□○□□
赤Ax10	○□□○□□
赤S	○□□○□□

所持金 24326 G

預金・借金 G

制限移動	通常移動	全力移動
3 m	14 m	42 m

回避	防護点
2d+ 0	10

HP
33

魔物知識/弱点	先制力
2d+ 6	2d+ 8

生命抵抗	精神抵抗
2d+ 8	2d+ 13

MP
84

魔法技能	Lv.	魔力	魔法技能	Lv.	魔力
神聖魔法	6	9			

装備品		説明
頭	聖王の冠	1ゾロでも魔法行使可能
耳	石人の耳飾り	防護点+1、敏捷度-6
顔	聖印（顔全体がガメルになっている）+星見の眼鏡	昼でも星が見える
首	奇跡の首飾り	生死判定振りなおし可
背中	軍師□象	
右手	知力の腕輪	知力+1
腰	アルケミキット	
足	見守りのサンダル	足元の罠に危険感知+2
その他	信念のリング	精神抵抗+1

装備品		説明
左手	スターマナコンバータ	星見てれば5分間ごとにMP1回復。5点MCC代用可

その他メモ

シンリはディルフラム地方で生まれたフロウライトです。
シンリは本来センティアンとなるべき魂が手違いにより、魔晶石の塊に宿ってしまうことにより生まれた。そのためか生まれつき顔がガメル神官の聖印を象ったものである。しかし、シンリは自身が異常な存在であることには気づかず地下で幼少期を過ごした後、様々な期待を持ち街へ這い出て行った。シンリがまず最初に浴びたのは奇異の視線、そして嘲笑うかのような笑み。地下から出たばかりのシンリはなぜ自分が変わった目で見られるのか、そして笑われるのかを理解することができなかった。いずれその視線は異常者を見る嫌悪に満ちたものへと移り変わっていった。シンリは迫害を受け、地下から出て一年後には顔を隠し、常に俯いて歩くようになり、体の発光はより鈍いものへと移り変わっていった。そして百年は経った日、シンリは動くことさえ止め、石のように日々を過ごすようになった、しかしながら動くことを止めても思考を止めることはできず脳内では『何故自分の顔はこんな顔なのか』『どうして自分だけが』『なぜ自分なんかが生を受ける必要があったのか』と考えるだけ無駄な思考がぐちゃぐちゃと暴れまわっていた。地下から出て二百年経った日、彼は漸くあることを思いついた、それは自分の無意味な生を終わらせることだ。今までで最高の考えを思いついた彼は、地下から出たばかりの日と同じ、眩しいほどの発光をし、立ち上がった。百九十九年ぶりに顔をあげた彼が、久しぶりに見たものは太陽より眩しく光るソレイユであった。

自動失敗チェック

□□□□⑤
□□□□⑩
□□□□⑮
□□□□⑳
□□□□㉕
□□□□㉚
□□□□㉟